

これからの福祉の制度

愛知県・愛知県立岡崎商業高等学校 3年 村松 里香

今、日本は高齢化が急速に進んでいる。2008年には、65歳以上の高齢者が日本の人口の約22%を占めている。¹⁾しかし、これだけ高齢化が進んでいるが、そのための保険や年金など、福祉の制度は今の状態に追いついていないと思う。後期高齢者医療制度など新しく政府が政策を打ち出しているが、どれだけ多くの高齢者を助けることができるのだろうか。

私は六人家族で、祖父、祖母とも一緒に生活をしている。祖父は、数年前病気にかかり、以前より体が不自由になってしまった。歩くことなど今までできていたことが徐々にできなくなってきているのだ。そんな祖父の身の回りのお世話をしているのは祖母だ。祖父には祖母という手助けをしてくれる存在がいるから安心して生活をしていることができていると思う。しかし、世の中には手助けを必要としているのに、助けてくれる人がいなくて不自由な生活をしている高齢者の人がいると思う。これから高齢化が進んでいけばさらにこのような人たちは増え続けると思う。私は、このような人たちを助けることができるのは、年金や保険、福祉の制度しかないと考えている。

「高福祉高負担」「中福祉中負担」「低福祉低負担」と福祉にはさまざまなやり方がある。どれが一番いいのだろう。もちろん高齢化が進んでいるので、これから高福祉は必要とされることだと思う。しかし、その分、私たちも高い負担を負うことになる。だが、低負担では、質のいい福祉の制度を受けることはできない。それに自己責任も重くなると思う。どのやり方にも必ず長所と短所があるのだ。

「高福祉高負担の国」で有名なスウェーデンを調べてみると、国民の税負担がとても高いという短所がある。しかし教育費はお金がかからず医療費はほぼ無料という長所があり、高福祉・高保障であることを知った。しかし、さらに調べてみると医者不足の問題もあり、緊急外来で6時間待ちになってしまったという話や、高福祉の影響もあり、不況で失業者が増えているということも知った。高福祉高負担にも限界があるのではないかと考えた。

低福祉低負担の長所は、何よりも自分たちの背負う負担が低いことだ。生活していくなかで、高い負担を背負うことは大変なことだと思う。できれば避けたいと思う人が多くいると思う。しかし、いざとなったときに、低福祉しか受けられない状態では、これから高齢化がさらに進んでいく状態では、あってはいけないことだと考える。

もし私とその三つの中で選ぶなら「中福祉中負担」がいいと思う。高福祉を受けたいのが本音だが、だからといってこれから働くようになったときに高負担を背負うことには不安がある。ま

た、いくら低負担で自分への負担が少ないという状況となっても、いざとなったときに低福祉ではどこまで自分を助けてくれるのか心配になってしまう。それならば「中福祉中負担」で、自分が無理をしなくてもいい程度の負担で、困ったときはすべてを国の保障に頼らず、半分だけ手助けをしてもらうといいのではないかと思った。そして、残りの半分は、家族や親戚、近所の人などの人との関わりでお互い^{かか}を助け合うといいと思う。福祉や保障の制度は生活面を支えることができても、精神的な部分はなかなか支えることは難しいと思う。家族や親戚、近所の人など人と人の助け合いは、その精神的な部分を支えることができると思う。一人ぼっちになってしまっ^てて心細いことがあっても、周りに自分を支えてくれる人たちがいるだけで心強くなったり、安心することができると思う。また笑顔で生活することもできると思った。私は、日本が国の制度と人同士が支え合うバランスがちょうどよくなるようになると思う。もし、そうなれば日本は高齢化に対して、あたたかみのある対応ができる本当の介護、福祉に近づけると思った。生活面を保障するのは、お金があればいくらでもできると思う。人の心はお金だけでは動かせないし、支えることはできないと思う。時間はまだかかるかもしれないが、いつかそういう国になってほしいと願っている。

私も、今は祖父のお世話は祖母に全てまかせてしまっている。もっと家族で支えていけたらいいなと思った。そうすることができれば、もっと家族が仲良くなり、素敵な家族になれると思う。なにか新しいことを始めるにはまず小さなことでも、一步を踏み出してスタートすることが大切だと思う。だから私も、自分ができることはなるべく手伝うようにして、今まで頑張ってくれた祖父や祖母が暮らしやすくしていきたい。そのために家事をして、少しでも祖母の助けになるように自分から行動したいと思った。これから私が社会人になったときは、国に保険料などをしっかり納めていくようにしたい。そして、国の政策も私たちを裏切らないものにしていてくれることを願う。

事務局注 1) 「統計からみた我が国の高齢者－「敬老の日」にちなんで」総務省統計局、2008年9月14日

